

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

さて、道端に紙切れが落ちていたら皆さんはどうするでしょうか。単なる紙切れだったら無視するでしょうか。ところがこの紙切れに、福沢諭吉さんの顔があったとする。つまり一万円札です。私ならいくら考えごとに夢中になっても、ハッとして立ち止まってしゃがみ込むに違いありません。私がいかに人間でなかったら、警察に届けなくてポケットに入れようとするでしょう。

そのとき風が吹いて一万円札が飛ばされ、他人の家の庭に落ちたとします。庭には低い柵があり、「立入禁止」という札も立っている。私は一瞬立ち止まりますが、一万円にひかれて柵の中に入るかもしれません。するとその家の人が、私が侵入したのを見て「ドロボー」と叫ぶ。私は一万円を取り損なって、庭からあわてて逃げ出すでしょう。

もしも①宇宙人が私を観察していたとしたら、おカネの前で急に立ち止まったのを見て、私の目の前に石のような大きなモノが置かれていてと解釈するかもしれません。私はおカネの前で立ち止まったのですが、たまたま宇宙人には紙幣が見えず、人間だけに見える大きな石の前で歩みを止めたのではないかと思う。また、私が「ドロボー」といわれて庭から逃げ出したのを見て、宇宙人は彼らの目には見えないけれど、砲丸のようなものが飛んできたから私が逃げたと思うかもしれません。

なぜ私がこんな話をするのかというと、おカネというのはつくづく不思議なものだと思うからです。それは物理的には、風が吹いたらふうーと飛んでいくような軽い紙切れにすぎません。でもそれが一万円札だと、一万円の価値があるために私の歩みを止めさせる働きをする。このようにおカネは、人の行動に大きな影響を与えるんです。

同じように、②コトバというものも不思議です。「ドロボー」という声は、物理的には単なる空気の振動です。ところがそれがコトバとして発せられるとドロボーの意味を持ち、その意味を知っている私を逃げさせる。「立入禁止」という文字も、物理的にはただのインクのシミです。ところがそれが書きコトバとして使われると、私を柵の前に立ち止まらせることができる。「愛してる」と手紙に書いてあったら、ドキッとしたりニコッとしたりするでしょう。手紙の文字はインクのシミにすぎないのに、人の心を大きく動かすのです。

空気の振動や紙のシミが人間の行動に作用するという事実は、物理法則では説明が付きません。物理学の長い長い連鎖反応を使うと説明できるかもしれませんが、直接的にはできません。これは本当に不思議なことです。生物学や生命科学でもきちんと説明することはできません。それはなぜかというところ、どの紙にどういう印刷がされていけば一万円の価値を持つおカネになるかといった情報は、人の遺伝子に組み込まれていないからです。ドロボーというコトバがドロボーの意味を持つという情報も、生まれたばかりの人間の脳には入っていません。

説明のつかない不思議なものに対し、それがどういう原理で動いているのかを知ろうとするのが、経済学も含む科学というものです。③私はどうして単なる紙切れである一万円札を持っていると、ニコニコするのでしょう。皆さんだって、一万円の小遣いをもらえればうれしくなりますよね。

私たちは紙を食べるヤギではないので、モノとしての一万円札があるからうれしいわけではありません。一万円札には「日本銀行券」と書かれています。「日本銀行という公共機関が発行しているから価値がある」「法律で一万円の価値があると決められているから価値を持つ」と考えている人が多いでしょう。経済学者にもそういう人がいます。

日本初の貨幣である「和同開珎」という銅貨は、七〇八年につくられました。これは中国の貨幣にならって発行されたもの。当時の日本政府は和同開珎を流通させようとしたのですが、実際には全然使われなかった。どうして使われなかったのかはよくわかりません。和同開珎の多くは神社仏閣の遺跡の柱の下の部分から発掘されている。当時の人にとって銅は貴重でしたし、貨幣には難しい字が書かれていたので、^aもつばらおまじないとして使ったのではないかと思われま

奈良や平安時代の政府はおカネを発行しては人々に「使え、使え」といいましたが、ちっとも使われないので一二期やっであきらめました。ところがそのうち日本の経済は発達して、日本海を中心にして中国や朝鮮半島と活発に貿易をするようになる。すると、日本で商売をする人が、中国のおカネを使いたんです。中国の王朝は唐、宋、明と変わりましたが、④日本では唐の時代に発行されたおカネが宋や明の時代になっても使われていた。滅びた王朝が発行したおカネですから、中国に持って行って価値を保証してもらうことはできません。それでも当時の日本人はそれを使っていた。このようにおカネの流通は、政府の思いどおりには制御できないのです。

私たちがどうして一万円札を持つとうれしいのかといえば、他人が一万円として受け取ってくれるからです。この「誰かが受け取ってくれる」というところがポイントです。これは物理法則ではありません。多くの人が「価値がある」と思っていることに意味がある。——社会科学の出発点は、ここにあります。

人々の思い込み、心理、期待によって、一枚の紙切れが一万円の価値を持つ。すべての人が一万円の価値があると思うから、一万円分の価値が生じる。この論法を「自己循環論」といいます。

おカネの価値に、物理的根拠はない。「皆がおカネだと思って使うから皆がおカネとして使う」という自己循環論が、おカネに価値を与えている。紙幣だけではなく、硬貨や金銀も同じです。昔の金銀は宝としてではなく、おカネとして他人が受け取ってくれるから、おカネとしての価値を持っていた。そうでなければ人に渡さずに自分で持ち、装飾品として使うでしょう。金銀がおカネとして使われるということは、装飾品としてのもの以上の価値があったということです。

同じことはコトバについてもいえます。コトバは単なる空気の振動。「ドロボー」といつてもすべての人間が「ドロボー」という意味にとるのではなく、アメリカで叫んでも誰も振り向いてくれません。日本語を理解する人にしか通用しないわけです。

インクのシミである文字、書きコトバも同じです。「立入禁止」と書かれた看板を見た人は、そこに入ろうとしない。「立入禁止」の意味を持つとみんなが思っているから、通用するんです。

このように、おカネもコトバも自己循環論法の産物です。誰もがそう思っているから価値や意味を持つという、不思議な存在。だから、物理的性質としても遺伝子的性質としても説明がつかない、みんながそう思っているというプロセスで価値を帯びた、意味を持ったということです。

(岩井克人「おカネとコトバと人間社会」)

問一 二重傍線部 a「もっぱら」の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 予想以上の結果が出るようにものごとを行うこと。

イ ものどもの状態がすこしずつ変化していくこと。

ウ ものどもの一部分が目的に合っているということ。

エ 他のことではなく一つのものごとに集中すること。

問二 傍線部①「宇宙人」とあるが、ここで筆者は「宇宙人」をどのような存在のたとえとして用いているか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア おカネの価値やコトバの意味を少しも理解していない存在。

イ おカネの価値は分かるが、コトバの意味を理解していない存在。

ウ コトバの意味は分かるが、おカネの価値を理解していない存在。

エ おカネの価値やコトバの意味を完全に理解している存在。

問三 傍線部②「コトバというものも不思議です」とあるが、どのような点が「不思議」なのか。三十五字以上四十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部③「私はどうして単なる紙切れである一万円札を持っていると、ニコニコするのでしょうか」とあるが、なぜか。その理由を本文中の表現を用いて三十字以内で説明しなさい。

問五 傍線部④「日本では唐の時代に発行されたおカネが宋や明の時代になっても使われていた」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 後になって使われるようになるおカネでも、始めから皆にその価値を認められるわけではないということ。

イ 海外で作られたものより、日本で作られたおカネの方が価値があるわけではないということ。

ウ おカネを発行した中国の王朝が変わったという情報も、必ずしも日本に伝わるわけではないということ。

エ おカネの価値は、国家が保証したり法律で定めたりすることで決まるわけではないということ。

問六 本文中の筆者の考えとして最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア コトバは、国や文化の違いを越えて互いに相手に同じ価値観を伝え合うことができる。

イ おカネやコトバには、皆がそう思うから価値や意味を持つという性質がある。

ウ 生物学や生命科学が進展することでおカネやコトバの秘密が完全に解明されるだろう。

エ おカネが価値を持つのは、金銀などのように装飾品としても利用できるからだ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

嘉穂は、幼い頃に母を亡くして祖父母に預けられ、父が再婚した後も祖父母と暮らしている。常に気を遣う生活の中で、歌うことに心ひかれていた。嘉穂の友人のひとみは、クラスメイトの後藤に好意を抱き、音楽教師である後藤の母にピアノを習おうと考え、嘉穂に付き添いを頼んだ。そこで歌の素質を認められた嘉穂は、後藤の母からレッスンを受けることになった。その後学校で後藤を伴奏に独唱することが決まり、練習を重ねていた。

レッスンが終わって、外にでると、もうすっかり日が暮れていた。秋の日は、あつというまに夜がきてしまう。

「うわ、寒くなってきたね」

ひとみが嘉穂に腕をからめてきた。

「うん。でも、今日、待っててくれたんだ。退屈じゃなかった？」

ひとみが顔をのぞきこんでくる。

「ぜんぜん」

空を見上げて、星がでていると騒ぎだした。

①ひとみは万華鏡みたいな子だと思う。万華鏡はちょっと角度をずらすと、目の前の模様が全然変わってしまう。それと同じで、ひとみの話はくるくると変化していく。自分で角度を変えて、話をし、それがとても心地がいい。だから聞いているだけで満足だった。

今も、星の話から、昔聞いた神話の話へとなんの脈絡もなく変化していくのだけれど、ひとつひとつの話が面白い。

「後藤、ちつともでてこないね」

「嘉穂がつぶやくと、ひとみがXを落とす」

②あのね、あたしね、夢を見たんだ」

言いにくそうな声だった。

「後藤と嘉穂が手をつないでてね、霧の中に消えて行っちゃったの。あたしはそれを必死に止めようとして、でも、声がでなくて、体も動かなくて……」

「ええ？　ありえない！」

嘉穂はけらけらと笑いだした。

「ほんと？」

びつくりするほど真面目なひとみの顔を見て、笑いがひっこんだ。

「当たり前でしょ。ありえないよお。夢のセキニンまでとれないからね」

「つらかったんだよ。目が覚めてからも、夢の中の気持ちがよくリアルに残っていてさ。のけ者になっちゃった気分とか、馬鹿にされてるような気分とか、一気に襲いかかってくるようでき。生々しくて、泣きそうだった」

「それで、この頃少し元気がなかったんだ。ひとみらしくないって思ってたけど……。大丈夫？」

「だと思っただけど。どうしちゃったんだろうね、あたし」

※1 逆夢ってあるじゃない。それだよ。きつと。気にしない、気にしない。いっしょに霧の中に消えていくのは、ひと

みだよ。ね」

その言葉は無視された。

「今日、嘉穂の歌を聴くために、残ってよかった」

ほつとため息をつくように言った。

「え？　あたし、聴いてる人のことなんか気にする余裕もなかったよ。歌うだけで手一杯。ひとみだったから歌えたけどさ」

「ふーん」

イイガイなことを聞いたという声をだした後、すぐにXを落とす。

「もう、大丈夫だって、後藤だって、ひとみのこと、気にいってるって」

ひとみが顔をあげる。

「そんなこと、わかんないよ」

強いウケチヨウにはじきとばされそうになった。

「嘉穂って、人のことばっかりだよ」

と空を見あげて言う。

なんの事だろう。

「自分を全然外にださない」

「え？　そんなことないよ」

「そんなことある」

「そうかなあ」

「いっつも聞き役。自分のことはエゴ的にしか話さない」

「は？」

「無駄なことはいっさい言わないってこと。どうしてあんな夢、見ちゃったんだろうと思っただ。すごく心配になっちゃうのはなんでもかなくて。そしたら嘉穂が自分のこと、ほとんど言わないからだって考えついたの。音楽室で後藤といっしょにする練習の時だって、歌うだけ。ほとんどしゃべらないもん」

③ 返す言葉が見つからない。

「時々、水臭いと思っちゃうことあるんだよ。隠していることがあるんじゃないかって。あたしに言っていないこと、たくさんあるんじゃないかって」

後ろから枯れ葉を舞いあげる音がした。

嘉穂は自分の心の中をのぞきこまれるのが嫌いだ。抱えている問題を知られたくなかった。水臭いと言われれば本当にそのとおりだ。でも、じゃ、話せばなんとかなるのか？ 嘉穂は首を横に振る。話してもどうにもならないことの前で、ひたすら自分をだささないから生活していけるのだ。

「でね、今日、聴いてて思った。あたし、嘉穂の歌、好きなんだって。スナオにそう思えた」

調子を変えてひとみが言う。話が突拍子もなく飛んでいくことにはなれている。今は救われるような気分でその話題にとびついた。

「下手なんだよ。あんなに※2 ダメだし、でてたでしょ」

「技術的なことはわかんない。でもね、嘉穂の声だよ。気持ちが全部でてる気がした。いいよね。まっすぐで、透明で、それで、明るくて。前に前に声がでていってさ。はじめて、嘉穂ってこういう子だったんだ、なんて。つきあってる時間は長いのにね。そしたら、すごく気持ちが楽になったんだよ。不思議だよね」

④ ひとみが鼻の横をかいた。

「歌って、すごいよね」

⑤ 嘉穂の視界がぼやけてきた。

「ひとみ、そのせりふ、くさいよ」

ひとみと目をあわせて笑いあった。

(にしがきようこ『ピアチエーレ 風の歌声』)

※1 逆夢——現実には夢で見たことと逆のことが起こるとされる夢。

※2 ダメだし——欠点や弱点などを指摘すること。

問一 傍線部ア、エのカタカナを漢字に直しなさい。ただし、楷書で書いてねいに書くこと。

問二 本文中のXにあてはまる語として最も適切なものを、次のア、エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 肩 イ 目 ウ 腰 エ 声

問三 傍線部①「ひとみは万華鏡みたいな子だと思う」とあるが、これはひとみのどのような点をたとえた言葉か。三十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部②「あのね、あたしね、夢を見たんだ」とあるが、この夢を見たことでひとみはどのような気持ちを抱いているか。五十字以内で説明しなさい。

問五 傍線部③「返す言葉が見つからない」とあるが、嘉穂がこのようになったのはなぜか。その説明として最も適切なものを、次のア、エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 内にこもってしまう性格の自分がひとみだけにだけは心を開いていたのに、本人に全く伝わっていなかったと気づき、悲しくなったから。

イ 人に相談しても解決しないような悩みを隠し続けてきたのに、ひとみにそのことを指摘されて動揺し、対応できなくなってしまうから。

ウ ひとみのことを思っただけで話を聞く側に回っていたのに、実はもつと嘉穂のことを話してほしかったのだと言われ、反省したから。

エ 穏やかに暮らすため必死に秘密を守りとおしてきたのに、ひとみにそれを遠慮なくあばかれ、怒りがこみあげてきたから。

問六 傍線部④「ひとみが鼻の横をかいた」とあるが、この時のひとみの心情の説明として最も適切なものを、次のア、エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 友人なのに嘉穂のことを理解できない自分を責めていたが、嘉穂の歌からその気持ちを読み取ることができて嬉しくなり、これからより良い関係を築けるといふ予感がしている。

イ 後藤と仲の良さそうな嘉穂に嫉妬し八つ当たりをしてしまったが、嘉穂の歌う姿から彼女がひたすら練習に打ち込んでいることが分かり、自分の勘違いが恥ずかしくなっている。

ウ 自分ばかり話して嘉穂の話を聞いていないことを気にしていたが、嘉穂の歌で会話以上に彼女のことを理解できたといい、感動をそのまま言葉にしてしまった自分に驚いている。

エ 親しいはずなのにどこか心に壁を築く嘉穂に不満を抱いていたが、嘉穂の歌を聴いてその心に触れたように感じ安心し、それを率直に伝えたことで照れくさくなっている。

問七 傍線部⑤「嘉穂の視界がぼやけてきた」とあるが、この時の嘉穂の説明として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 不純な気持ちでピアノを習っていたひとみに、歌で音楽の素晴らしさを伝えられたことを誇らしく思っている。
- イ ひとみに声の良さをほめられたが、歌の良さはまだ十分に表現しきれていないことにもどかしさを感じている。
- ウ 普段隠している自分の気持ちだが、歌によってひとみに伝わっていたことに気づかされ、感激している。
- エ 落ち込んでいたひとみを歌で元気づけられたことで、自分の歌が持つ力に自信を持って喜んでる。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

約35年前、私は理学部生物学科の人類学教室に進学した。ここは、ヒトという動物の進化について研究するところで、私の目的はアフリカで野生チンパンジーの研究をすることだった。しかし、いきなりアフリカに行くわけにもいかない。まずは、学部3年の夏休みから野生ニホンザルの研究を始めた。調査地は房総半島の真ん中。ア【廃屋】になったイノウカを基地にして研究が始まった。水道はある、プロパンガスもある。が、状態は原始的そのもの。ここで経験を積んだ後、博士課程からアフリカで野生チンパンジーの調査にかけた。

こちらは、タンザニアの首都ダルエスサラームから西に1000キロ入ったタンガニーカ湖畔。もちろん電気なし、ガスなし、水道なし。湖畔の小さな町からの交通手段は船外機をつけたボートしかない。周囲150キロ以内に病院もない。ここで通算2年半の調査を行った。

①このような経歴なので、およそどんなことにも驚かない。しかし、困ったことに、後継者があまりいないようなのだ。私自身は現場を離れてもう何年にもなるが、今も研究している仲間たちに聞くと、日本人の後継者がいないらしい。私も、「よくそんなところへ行きましたね」「よく親御さんが許しましたね」と言われる。そう、うちの親御さんは娘をそういう調査地に出したのだ。もっとも、結婚していて、夫も同じ研究をしていたが。

最近の若い人たちにとって、電気もガスもないようなアフリカの奥地で調査をするというのは、A ことなのかもしれない。ましてや、親たちにとって。しかし、私の親も心配はしていたが、私自身、親に何と言われようと絶対に行くぞという決心をしていた。その他のことでも親とは何度も対立した。そのたびにこちらも、必死で自分の考えを述べて親を説得しようとした。②そんな対立の中で育ってきたのだと思う。

今の若い人たちは、親に言われるとその通りに聞いてしまうようだが、彼ら自身、リスクを冒すことを非常に嫌う。③我が国のリスク回避の傾向は、さまざまな統計で明らかだ。今どき、殴り合いのけんかをする若者などほとんどいない。自治体も学校も、子どもにけがをさせないように万全の注意を払っている。大学の野外実習も、昔と同じことはとても「危険」できない。そして、電気、ガス、水道は当然あり、ネットもウ【カ】ンピされている先進国への海外留学の希望者すらも減っている。

霊長類のみならず、野生動物の研究者の間で事故率が高いのは確かだ。知り合いの中には、がけから落ちた、ボートが転覆したなどで亡くなった人もいれば、ゲリラにエ【誘拐】された人もいる。私たちの世代は、こんな研究をする以上、それは運命の一部と思っていたし、それで研究の情熱が冷めたことはない。しかし、今はそう聞いてその道に行こうと思う人は少ない。子どもの数が少なくなり、子どもの死亡率が下がり、1人か2人の子どもを大事に育てるようになった。そこで、リスクなんかとても冒せない。日本が安全で、ある意味で居心地のよい社会になるにつれ、人々はリスク回避を極端に重要視するようになった。そして、子どもは絶対に安全に育ててほしいと願うし、そうであって当然と思うようになる。そうして、誰もはずきりと計画していたわけではないが、大なるリスク回避の社会ができてしまったのだろう。

それは悪いことではないし、昔が良かったわけでもない。問題は、それによって、さまざまな本場の冒険の機会も失われてしまっていないかということだ。肉体的には、ある程度の冒険をしなければ、どこまでが自分にも他人にも安全なのかは体得できないと思うのだ。それをせずに、肉体的安寧に慣れてしまった中で、知的な意味での冒険だけは可能なのだろうか？

リスク回避の傾向は、若者の自由な発想や※1イノベーション、人生の目標を多様に設定する自由をも阻害してはいないか？ 安全確保は大事だが、いろいろな意味で前人未踏の領域に踏み出そうという若者を育てるには、それを許し、背中を押す社会でなければならない。私たちは、果たして④そういう社会を作ってきたのだろうか。

(長谷川眞理子『毎日新聞』「時代の風」による)

※1 イノベーション——新しい発想で物事に取り組むこと。

問一 傍線部ア～エのカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。漢字は楷書でいいねいに書くこと。

